めざそう核兵器廃絶

2017年原水禁世界大会

東京土建は2017年原水禁世界大会で、本・支部の代表団を8月7日～9日までの長崎大会に派遣しました。国連で核兵器禁止条約が採択され、核廃絶に向けた新たな情勢の下で大会は成功しました。参加者の感想(一部)を紹介します。

国連や海外の代表に核廃絶の願いをこめた折り鶴が渡された

禁止条約採択を力に 地域での活動に活かしていく

宮田さん

【本部副委員長・宮田清志記】今年の原水爆禁止世界大会長崎の初日は6千人の参加でした。初参加した国連軍縮担当上級代表の中満泉さんの「今こそすべての国々が対話を促進し共通の理想のために立ち上がる必要があります」との訴えに大変大きな拍手がわきおこりました。海外からの代表も次々に熱い思いを語り、市民運動の大切なことを話していました。

　2日目は佐世保行動でクルーズに参加しました。この基地は世界で唯一の強襲揚陸艦部隊の前進配備基地になっていて、7隻のエルキャックを持っています。アメリカの「なぐり込み部隊である海兵隊と同じような組織を作り、訓練する所を作りつつあること、そして水陸機動団となるべく着々と進めている」ことなどを見聞きし、専守防衛はどこに行ったのだと思いました。また思いやり予算で作った米軍の施設や住宅の問題では、そんなお金があるなら「国民のために使え」と声を大にして言いたい。

　3日目の閉会総会は四国地方の人々も集まり7千人となりました。その中でビッグサプライズがありました。それは国連会議議長のエレン・ホワイトさんからのメッセージでした。「今年は特別にすばらしい年になりました。大いなる楽観主義を持って条約採択しました。しかし終わりではありません。引き続き皆さんのリーダーシップを頼りにしています」と読み上げると、満場の拍手に包まれました。

　また禁止条約の調印が始まる9月20日から26日の間、世界同時行動「平和の波」が提唱され、共同行動は「ヒバクシャ国際署名だ」「この行動を大きく成功させよう」と行動提案があり、「長崎からのよびかけ」が訴えられ満場の拍手で確認しました。

　今年の長崎大会は老若男女を問わず条約採択を力に今後の運動に進もうという大変すばらしい大会となりました。私もこの力を借りて平和運動に活かしていきたいと思います。ともに行動参加した仲間も多くの元気をもらい帰ってきました。それぞれ地域にもどり平和のために活かしてもらえると確信しています。

原発は危険な地雷 原爆と同じ過ちを実感

隅田さん

【新宿・大工・隅田祐太郎記】2日目の分科会は「核兵器と原発」というテーマのところへ参加しました。核兵器禁止条約における原発問題。ウランやプロトニウムやら原爆に使われたものを平和利用のために原子力として使っていること、それは地雷ともいえる極めて危険なものであることを学びました。6年前の福島原発事故は原爆が落ちた当時のことと同じ過ちを犯したのだなと実感しました。目に見えない兵器としてこんなに怖いものはありません。

　分科会が終わった後の自由行動で長崎の街を見て回りました。街のあちこちに慰霊碑があったり、中には当時焼け残ったものがそのままの形で残っていたりでした。それらを目の当たりにするとあの時の悲劇を忘れてはいけないという想いにさせられます。

　カメラで建物を撮っているときには地元のお婆さんに声をかけられ、当時のこと、その建物のことについて話を聞きました。

　やはり今になっても忘れられない惨劇、後世に伝えていかなければならないことなのだと何度も何度も痛感させられました。

　参加する機会を頂き、貴重な体験を学ぶことができたことを感謝致します。

医師にも見放された 突き刺さる被爆者の訴え

毛塚さん

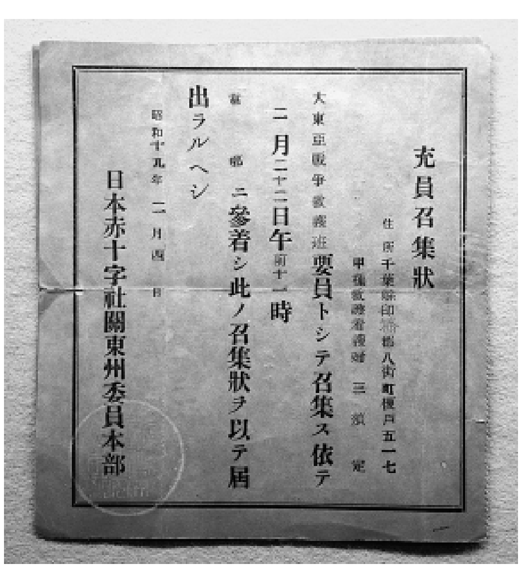
【杉並・主婦・毛塚幸子記】ぜひとも行きたかった建設職人殉難者慰霊の「不戦平和の塔」の立派な石碑に手を合わすこともできました。その石碑の後に全国から献納された折り鶴の中で「東京土建主婦の会」の36支部の手で折られた折り鶴も確認することができ感極まりました。

　3日目の閉会総会では被爆者である長崎被災協の松谷英子さんが訴えました。3歳で被爆し一時は生死の境をさまよい、医師にも見放され、6歳迄の記憶が無かったこと。頭に瓦が刺さり傷を治すのも2年半かかったこと。なんとか命はとりとめたものの、右手、右足のマヒの生活、それでも37年間働いてこられたことなどを伺いました。

　これからも一生、原爆の後遺症を背負い生きていかなければならないと思うと、心に重く突き刺さるものを感じました。

　また子ども達による訴えで、私達は「ピースメッセンジャー」になりますとの発言に力強いものを感じました。

　唯一の戦争被爆国である我が国は戦争を2度と起こしてはいけない。核の無い平和な世界へと次世代へ伝えなければと改めて強く思いました。



充員召集狀
住所 千葉縣印旛郡八街町榎戸五一七
甲種救護看護婦 三[illegible] 定
大東亞戰爭救護班要員トシテ召集ス依テ
二月二十二日午前十一時
當部ニ參着シ此ノ召集狀ヲ以テ届出ラルヘシ
昭和十九年二月四日
日本赤十字社關東州委員本部

従軍看護婦に宛てられた赤紙(召集状)

戦争の怖さは後から 従軍看護婦に聞く寺園さん

従軍看護婦立像
(日赤本社)

　一昨年、日本赤十字社の元従軍看護婦の守屋ミサさん(94歳)と小西テル子さん(89歳)から戦時中の様子を聞き取られた、日本医療労働組合連合会(日本医労連)中央執行委員の寺園通江さんにお話しをお聞きしました。

—なぜ元従軍看護婦への聞き取りをすることになったのですか。

【寺園さん】この企画が決まった時に入職したので、もともとの趣旨は分かっていないのですが、戦争法が2015年9月19日に強行採決されたことに対して、改めて平和の尊さや大切さや憲法を守っていかないといけないということが背景にあったのだと思います。

—取材でとくに気づかされたことは何ですか。

【寺園さん】日赤はかなりエリートの人たちが集まるのですが、そうした頭の良い選ばれた人たちですら戦争の怖さをあとから知ったと言われたのが驚きでした。なぜそういう環境があったのか。戦争は良くなかったと気づいたのがそのあとであったと言われ、あらためて憲法の重さを感じ、戦争は2度としてはいけないと思いました。

　1938年に国家総動員法でみんなが騙されたようなことがまた起きる前に、運動をつくらなければいけないと思いました。国家のために自分を犠牲にするということが叩き込まれた時代だった。愛国心がとても強く刷り込まれた時代だったと思います。

—お二人からどのようなメッセージを受け取られましたか。

寺園さん

【寺園さん】もっと病気のことだけでなく、社会に対して意識を持ちなさいというメッセージをいただきました。疎いというニュアンスでいわれました。もっと世の中に目を向けなさいと。

　その通りだと思うのですが、目を向けられないような環境があります。あまりにも忙しすぎて。でもだからこそ、自分の働き方だとか世の中のことにもっと目を向けないと戦争の足音がするようになってしまう。一年前には共謀罪が施行されるなんて思っていませんでした。

　世知辛い世の中だけど諦めないことです。学んだことを伝えていくことだと思っています。

赤紙1枚で 戦地で犠牲に

　1877年に西南戦争を機に博愛社が設立され、戦場の負傷兵を救護しました。その後、博愛社は1887年、日本赤十字社と改称されます。日本赤十字社は磐梯山噴火(1888年)、濃尾地震(1891年)、関東大震災(1923年)などの自然災害で救護活動も行なってきましたが、本来の目的は戦場で傷病人を救護することでした。

　養成した女性看護師にも召集令状を届け、日中戦争(1937年)から敗戦(1945年)までの間、のべ3万3156人を国内外へ派遣しました。戦火のなかで1120人が犠牲になったといわれていますが、実際はもっと多いといわれています。